看護の原点と未来

東京医療保健大学/大学院 副学長
医療保健学研究科 研究科長
医療保健学部 看護学科 学科長
坂本すが

「看護の原点」と聞いてどのようなことがイメージされるでしょうか。ナイチンゲールの『看護覚え書き』によると、病気とは回復過程であり、看護とは回復過程において患者をとりまく暮らしを健康的に整えていくことと捉えています。

日本の看護の原点はというと、ナイチンゲールよりずっと昔、聖武天皇の妃である光明皇后（701~760年）の功績に遡ります。光明皇后は医療施設である施薬院や、孤児や身よりのない人のために悲田院をつくり、病む人や貧しい人を救おうとしました。この光明皇后こそ「看護」とは“誰にでも平等に慈愛の心をもって接すること”であることを日本で初めて提唱し、実践された人ではないでしょうか。

では、現在、「看護とは何か」にどのように答えられるでしょうか。私たちは、看護の原点をどのように考え、看護を実践しているでしょうか。

2019年から新型コロナウイルス感染症が蔓延し、患者さんへの対応を含め人との交流のあり方、そして私たちの人生観までも変化を迫られました。かつてない難局に対峙しながら、それでも夢中で患者さんの最善に向け尽力した看護師たちの姿を数多く見聞きしました。まさに慈愛の心をもって病気の回復過程を支える。時代が変わっても、変わらない看護の原点がそこにあると思いました。

しかしコロナ禍を経て、看護師は日常を取り戻しつつも、変わらない過酷な労働環境に疲弊しているように思えてなりません。看護師の離職率も高くなっていることも気がかりです。国を挙げて働き方改革が推進されていますが、医療分野では医師に焦点があたる一方、看護師の働き方改革、労働環境の変化はなかなか目には見えてきません。

皆さんはこうした現状をどのように感じているでしょうか。生き生きと元気に働くことができているでしょうか。先の見えない混とんとした時代ではありますが、こんな時だからこそ、立ち止まり、“私はこんな看護がしたい”と考えることを提案したいと思います。自分の心の内の看護師としての原点を見出すという試みです。さらには、未来に向け、その“ありたい看護”を実現するために、どのようなキャリアを重ねていくとよいかもぜひ考えてみていただきたいと思います。

本講演では看護の原点をふまえつつ、未来に向け看護師たちが元気にいきいきと働いていくために、これからの“ありたい看護”を共に語ってみたいと思います。